

キリスト者に不可欠なものは、「祈り(使徒 1:14)」。そして「聖書(1:16)」か。また組織と言うより、キリストの体としての教会も重要だ。だから、欠けたユダの後任としてマティアが加えられた(1:26)。

弟子集団の金庫番であったユダ(ヨハネ 12:6)の後釜なので、会計能力のある者を選ぶかと思いきや、何とくじ引きで決めている(使徒 1:26)。

初代教会の役職任命は、さすがにくじ引きではなくなっていくが、指導者である使徒に従うというよりも、あくまで民主的な選びであることは注目されよう(6:3)。

「くじ」とは何か。漢字で籤もしくは鬮と書き、元来は神意を導き出す呪術的なト占のこと。ジャンケンよりも手早く分担を決められるアマダクジは、未来佛である阿弥陀様に依拠しての命名か。弟子たちがユダの後任を選ぶために、くじを引いて神意を押し量った心情は、どういうものだったろう。

ペトロは、増えた信徒を前に力強く語り(1:15)、ユダの最後を報告している(1:17~18)。同志ユダのことを語るペトロの胸には何があったか。ペトロも相当、躓いている。キリストを証した(マルコ 8:29)直後に厳しく叱責され(8:33)、イエスなんて知らねえと否んだ後、慟哭した(14:71~72)。そんな自分を思い返して「俺もユダと違わない…」と胸痛めたのではないか。

他の使徒だってそれぞれ心当たりがあり(14:19,50)、ユダを責められるほど厚顔ではなかったろう。ユダは、弱く、軽率で、若者らしい求道心から、自分が思い描く救済イメージに捉われていた。他の使徒もまた、そういう感じだ。

何がユダと他の使徒を分けたのか。イエスを銀貨 30 枚(奴隷価格)で売った(マタイ 26:15)、ではない。悔い改めない、でもない(27:3~4)。

他の使徒は挫折しながらもキリストの復活に出会い、十字架の赦しと贖いを知って罪人として生き続けた。しかしユダは、後悔こそしたものの、罪人として生きる道を手放した(27:5)。

ただこれとてこじつけのような対比で、救いと滅びを分ける線引きにはなるまい。真実は結局、分らないのだ。分ることは、ユダも、使徒も、私たちも、罪人であるということ。

「嗣業の土地は、人数の多い部族と少ない部族の間で、くじの定めるところに従って分配されねばならない(民数記 26:56)」。

北海道にも、満州にも、南北アメリカにも、古代のカナンにも、先住民がいた。だが先住民には権利などなく、仲間内の合法で土地を収奪し、仲間内でくじを引き、仲間内で神意の領地を分け合った。くじ引きによる祝福を神に感謝する入植者の足の下には、踏みつけられた者の苦しみがある。アイヌ、満人、ネイティブアメリカン、カナン人の苦しみがある。

復活されたキリストはどこにいるのか。昇天とは正反対の、地のさらに下へ降りて、先住民と共におられる。

キリストの愛と恵みを拒絶するとユダのようになる(使徒 1:18)、という滅びのモデルは当たらない。祈りを一つに合わせたら(1:14)収穫は十倍(1:15)、という栄光のモデルも当たらない。

ユダを反面教師にするのではなく、また能力や有用性を優先するのでもなく、私たちは「神頼み」のくじ引きを尊ぶ。

くじ引きは祈りであった。「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示してください(1:24)」。見えない神の御心は、私たちの祈りとなって実際に現れる。

踏みつけている足の下から、私たちに応えてくださるキリストの方へ向き直って、私たちは祈る。



#### 《おまけのひとつ》

くじを引くキリスト者の祈り 賭博者の祈りと何が違うのだろうか 統計や確率を頼みとしないことは似ている 賭博者には祈り通りの結果が勝利 キリスト者にとっては祈り通りでなくとも勝利